

人権ほつと六年二月号

「アライでいよう」

大阪教育大学

藪田 直子

八月号では、マイノリティとマジョリティの関係性について述べました。今月は、そこに「アライ (ALLY)」という立ち位置を加えてみます。アライとは、セクシュアルマイノリティ (LGBTQ) の運動から生まれた言葉で、主には「仲間」や「支援者」を表す英語です。最近では LGBTQ の運動に限らず様々な場面で使用されるようになってきました。

あなた自身がマイノリティ当事者でなくても、アライとして行動することは可能です。

社会を教室にたとえた場合、後ろに座らされている人、声が届きにくい人・集団がマイノリティだと説明しました。だからマイノリティの人権という視点に立つと、いかにその声を聞くのが、社会やマジョリティ (多数派) に問われているのだと言えます。

こう説明すると、マジョリティでいることに罪悪感を持ち、マイノリティのために「自

分の席を譲る？」と考える人もいるかもしれません。ではあなたはどこに座るのですか？

マイノリティ・マジョリティは立場であり、社会構造の問題です。自分が望まなくても、その時の社会の在り方があなたの座席を決めてしまいます。男性だとか日本人だとか。それらのカテゴリーから逃れることは難しいでしょう。しかし、どんな人であるかは自分で決められます。「関係ない」ではなく、前の席であな

たはどう行動するか。
一九八四年の実話をもとにした映画があります。『パレードへようこそ (原題… PRIDE)』二〇一四年。イギリスを舞台に炭鉱労働者とゲイ、レズビアンの若者たちの『連帯』を描いた映画です。コメディ要素もあり楽しめる作品でありながら、立場を超えた連帯の可能性を感じられます。

アライとは単にマイノリティを「理解する」だけなく、実際に差別に『NO』を表明し、積極的に行動する人をさしています。さあ、あなたはどん

な「パレード」に参加しますか。